

我が国の主要な輸出品である生糸を産み出した主役は、厳しい環境の中で即戦力として懸命に働いた工女たちである。そうした工女たちの様々な実態を純水館の資料や関係者の証言等で探してみたい。

一、工女争奪戦

「殺気立つ工女争奪！！」（「信濃毎日新聞」明治34年3月27日）の見出しで塩尻峠での山賊まがいの工女強奪の様子が生々しく報じられた。純水館でも明治39年に工女2人が、丸子から小諸に向かう途中大屋駅で諏訪の募集員に誘拐された。県は、明治43年に「工女募集取締規則」を制定して激しい工女の奪い合いに歯止めをかけた。

1 募集人数と出張員・助手を決める（第一工場 明治42年）

- ・小諸町 80人 土屋和助 助手2人
- ・北佐久 50人 堀越富重 助手3人
- ・南佐久 60人 小林卷之助 助手1人
- ・富山県 80人 中田 亨 助手4人
- ・岐阜県 30人 松原長助 助手1人 計300人

2 工女の募集方法

- ・正月～2月にかけて各農家を訪問して1年間の契約を結ぶ。
- ・前年度の工女宅を優先し不足の場合は新子を探す。
- ・手土産（大正9年大和屋呉服店5円の販売品引換）と手付金（一人5円）を渡す。
- ・親の経済状況を見て前貸金を渡す場合もある。（大正9年の契約書によると丸純工場工女296人中108人が前貸金有 内51人が30円未満11人が100円以上）

3 岐阜県吉城郡国府村(現高山市)の出稼ぎ工女数（明治43年役場統計）

長野県	44工場	281人	(内)純水館へ44人(再38人新6人)
岐阜県	21工場	126人	
埼玉県	5工場	36人	
その他	7工場	15人	計 77工場 458人

(1) 「ああ野麦峠」に登場する純水館

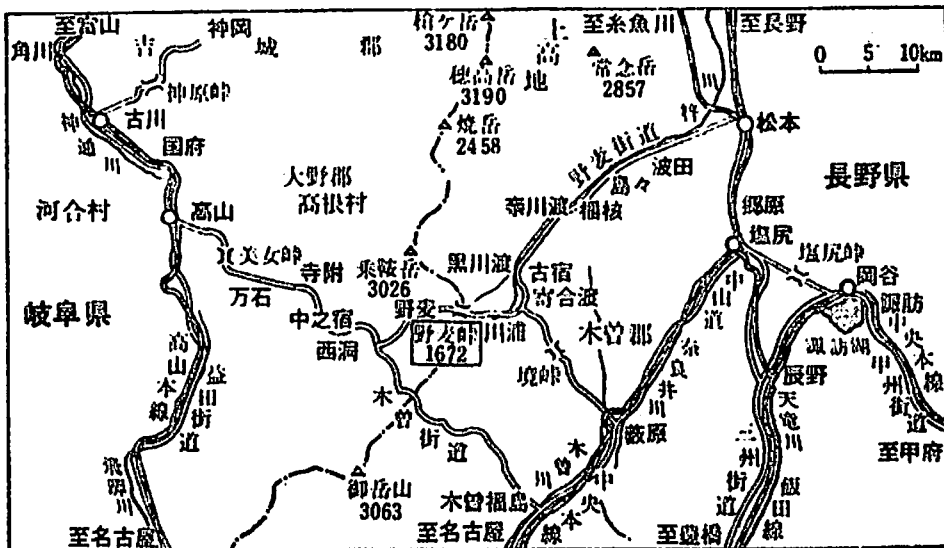
高山の宿の前には山一、山二、丸一、丸二、丸十、片倉組、小松組尾沢組、大和組、一山共、純水館、富国館等々……名だたる信州の大製糸の名を印した立て看板や高張提灯が立ち、そこで娘を送ってきた親と娘の別れが、吹雪の中でいつまでも続いていた。

(2) 雪深き急峻の峠を越えて ～野麦峠コース(推測)～

高山で1泊 → 美女峠を越えて寺附か中之宿で1泊 → 野麦峠を越えて川浦で1泊 → 島々か波田で1泊 → 松本から篠ノ井線(明治35年開通)と信越線で小諸

※雪の状況等で泊数が異なる

※明治末期には野麦峠越えは減少し日本海回りが多くなる



古川(現飛騨市)出身工女の孫の証言

……ばあちゃん(明治18年生)は合計十回程平野村(現岡谷市)の製糸工場へ行った。野麦峠越えもあったが多くはそりや馬車で富山へ出るルートだった。手付金と前貸金もったが、ばあちゃんは50～60円稼いできた。……工場の食事は朝・こびる(中間の軽い食事)・昼・夜の4回で、午後のおやつには揚げた蛹が出た。家の者よりうまい物を食べたと言っていた。……製糸工女には悲惨なイメージが付きまとうが、そんなにつらければ親は二度と工場へは出さなかつたらう。ばあちゃんは工場からもらった針箱をずっと大事に使っていた。

4 越中・飛騨から純水館へ

(1) 純水館第一工場の日誌より(明治42年)

- ・2月28日 越中ヨリ団体102人出発ノ電報アリ 飛騨工女12人・男3人・計15人本日出発ノ通報アリ
- ・3月2日 越中工男女101人午前9時51分小諸着列車二ヨリ無事入場セリ
- ・3月3日 飛騨工女12人及男3人入場ス

(2) 日本海の荒波を乗り越えて ～日本海コース(推測)～

富山まで出る(馬車や軽便鉄道)―(汽車)―泊―(船)―直江津泊―(汽車)―小諸

※ どこで船に乗るかは北陸本線駅の開業による

高岡―(明32)―富山―(明41)―魚津―(明43)―泊―(明45)―青海
―(大2)―糸魚川―(明45)―名立―(明44)―直江津
大正2年 北陸本線(米原～直江津)全通

中田舛見さんの証言(荒町の越中屋主人)

八尾(現富山市)は「越中おわら風の盆」で有名。昔から蚕種と養蚕が盛んで良質の繭生産地だった。純水館は八尾から繭の買入れと同時に大勢の工員を雇い、その中に父と伯父、そして母(結婚前)や姪もいた。

八尾から馬車で富山まで出て、富山から泊までは汽車に乗り、ここから船で直江津まで行き一泊、翌日信越線で小諸へ。

- ・純水館はよかった。特にスタッフがよかった。純水館を悪くいう人はいない
- ・純水館は花見、演芸会など娯楽を大事にした
- ・もし悪かったら純水館へ行くのを親は許さないはず

二、工女の生活 etc.

製糸業全盛期には県内外から2千人を超す工女が小諸に集まり、関連する商業も繁栄し町は活気に満ちていた。工女たちは年末に給料を持って帰郷し親を喜ばせることを楽しみに、12時間以上にも及ぶ厳しい労働に耐え懸命に働いた。(大正5年の工場法で12時間以内となる) 休日や祭りの日には工女たちが町に繰り

出し、運動会や演芸会等で英気を養った。しかし、不幸にも病気で亡くなり故郷の土に帰ることができなかつた工女がいたことを忘れてはならない。

1 純水館工女の一年 (第一工場 明治44年)

- 3月 春挽き開業式(1日) 中旬から夜業開始 十か年勤続表彰
- 4月 懐古園祭日休業(25日) (一人10銭支給、昼食は赤飯と鮭切れ目)
教育幻灯会(月末)
- 5月 春挽き閉業式(29日)
- 6月 本挽き開業式(8日) 養成所卒業式
- 7月 祇園祭
- 8月 浪曲会(12日) 盆休業(15, 16日) 盆賞として2年以上の工女に
85銭、新子に5銭の品物を与える
- 9月 下旬養成所夜学開始式 入学式
- 10月 繰糸についての講演会
- 11月 赤十字社記念日で休業(一人10銭支給 昼食に五目飯 神楽観賞)
- 12月 本挽き閉業式(25日) 年末賞与として反物支給 帰省

2 工女の相棒 繰糸機

- (1) **普通繰糸機** 10条繰未満の繰糸機で座って作業する(座繰)

【一般的】明治30年頃は2緒(2条繰)	明治35年頃は3緒	
明治末期は4緒	大正末期は5緒	昭和7年頃は6緒

純水館の場合 明治40年に4緒(4条繰)を導入し、その後徐々に5緒に切り替えていき昭和9年頃ほぼ完了

- (2) **多条繰糸機** 10条繰以上の繰糸機で立って作業する(立繰)
片倉等の大手では昭和初期に導入しているが、一般に普及するのは戦後である。純水館は昭和22年から導入。
- (3) **自動繰糸機** 自動的に繰糸する
純水館では昭和36年に3セット導入。



5条繰座繰機



多条繰糸機

3 全従業員で善光寺御開帳参拜 (明治45年)

5月8日午前7時40分列車ニテ1086人本日一列車二分乗シ、9時長野ニ到着スルヤ楽隊ヲ以テ出迎エラレ、予定ノ行進ヲシテ本堂参拝及戒壇巡リヲシテ公園デ昼食。茶利ヲ観覧シ午後3時城山公園ニ集合記念撮影4時伊勢町・東町・権堂・千歳町ヲ経テ停車場ニ至リ午後8時小諸ニ掃着。万歳ヲ三唱シ各工場ニ引取りタリ。

本日ハ天気好ク前夜ノ小雨ハ塵沈メタリ。一人ノ病者無ク落伍者ナカリシ。各工場員ノ熱心ナ注意アリシヲ以テ往復共無事ナリ。費用トシテ一人ニツキ90銭(弁当菓子共15銭 外75銭)

4 昭和天皇即位御大典奉祝献上繰糸工場に (昭和3年11月10日に京都御所で即位式)

全国の優良工場と共に純水館も献上繰糸工場に選ばれ、5つの工場から優秀な工女を10人ずつ選び、50人を丸久工場(小原)に集めた。天皇に献上するという神聖な仕事のため、飲食や行動を慎み、朝は入浴して身を清め、警官の警護のもと一週間仕事をした。

5 工女の無念の死

(1) 国府村統計(明治43年)にみる衝撃的数字

出稼工女 458人

【年齢別】

12~13歳	38人
14~15歳	78人
16~19歳	145人
20~24歳	136人
25歳~	61人

【途中帰郷者】 52人

労働に耐えない 2人

病気 41人 (内死亡6人)

不明 9人

【病気の種類】

肺結核 2人 肋膜炎 4人

気管支炎 1人 腹膜炎 1人

脚気 3人 胃腸 11人

不明 19人

※ 劣悪な労働環境と過酷な労働条件が全国的に問題になり、大正5年の「工場法」制定につながった。

(2) 異郷の地で亡くなった純水館の工女

① 丁重な葬儀で送られ故郷に帰った工女

明治39年7月6日 飛騨工女高垣サキ昨夕ヨリ病気良クナラ

ズ 郷里へ打電ス

7月8日 父親来ル 看病スルモ良クナラズ

7月9日 午後五時死亡

7月10日 海応院ニテ葬儀

- ・葬儀は僧侶の読経中本館員・各工場代表者・全従業員が焼香
- ・その後、本館員が火葬場で茶毘に付した
- ・純水館全員から 20 円 80 銭の香料
- ・弔意を表すため本館から全員に菓子(一人2銭)が給付される
- ・高垣サキの遺骨は父の胸に抱かれて帰郷した

② 何らかの事情で帰郷できずこの地で葬られた工女

明治43年6月3日 第二工場工女石原死去ノ報告アリ

- ・六供の工場上の高台に4基の墓石がある。
- ・いずれにも純水館を表わす⊙のマークが付いている。
- ・一番左側の墓石に「石原志ず」「明治43年6月2日」と刻まれているが出身地が不明だったため菩提寺の過去帳で調べ、「飛騨国吉城郡国府村半田、石原清助長女」と判明した。

明治43年に国府村から純水館に出稼ぎに来た44人の中の一人だった。

<p>明治三十一年 純淨室妙光信女 富山県越中国□□郡 八尾諏訪町山方愈長女 純水館工女山方ヨキ 行年二十一才</p>	<p>純淨利妙縁信女 純水館第四工女 飛騨国吉城郡船津村 明治廿八年七月十七日 中山清吉姉 □□ 行年十九才</p>	<p>大正三年九月三日 龜飯眞 法安妙光信女住 岐阜県吉城郡神川村 初太郎長女坂下トク 享年十有九</p>	<p>明治四拾叁年六月二日 龜菅譽妙蓮信女 俗名 石原志ず 廿二才</p>
-----------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------